スポーツ庁委託事業

令和２年度

「障害者スポーツ推進プロジェクト（障害者スポーツ用具活用促進事業）」

事業実施報告書

『障害者スポーツチームシンポジウム』の開催

公益社団法人日本義肢装具士協会

令和３年４月

1. 概要

スポーツは人々の健康維持や QOL(生活の質)の向上に寄与するだけでなく，自己肯定感の獲得や活力のある生活を営む上で重要な要素となっている。他方，障害者のスポーツ参画においては，人的・経済的支援だけでなく，スポーツ環境の整備や用具の利用等様々な条件が満たされる必要がある。

現在，義足ランナーや車椅子ユーザーなどのスポーツ参加を支援する障害者スポーツチームが全国に存在し，義肢装具士や理学療法士をはじめとするスタッフによるサポートのもと，練習会の実施や競技会への参加などが行われている。“障害”と“スポーツ”という共通項のもと，仲間が集い，時間・場所・目的を共有することができるこのような機会は，物理的・技術的支援のみならず，ピアサポートとしての効果をももたらすものである。

本事業では，既存の障害者スポーツチームの活動，運営のノウハウ，課題等を他者と共有することにより，今後，全国各地にこのような“チームの輪”が展開していくきっかけになることを期待し，チーム代表者を招いて Web セミナー形式のシンポジウム（名称「障害者スポーツチームシンポジウム 2020」）を開催することとした。医師や義肢装具士，理学療法士等，障害者スポーツを直接的に支援する専門職だけでなく，当事者である障害者，行政に携わる方々へセミナーへの参加を募り，シンポジストらと共に今後の障害者スポーツ促進を念頭に置いた支援のあり方や，用具の活用などについてディスカッションを行った。

2. 実施団体（公益社団法人日本義肢装具士協会）の紹介

公益社団法人日本義肢装具士協会(以下，JAPO)は，国内唯一の義肢装具士の職能団体として 1993 年に発足し，2017 年には公益社団法人として認可され，現在に至っている。

協会活動の目的は，義肢装具士の資質の向上及び知識・技術の研鑽，及び義肢装具をはじめとした福祉用具の普及・発展を通じた国民の保健・医療・福祉への寄与であり，このうちパラスポーツへの支援に関しては，2017 年 7 月，協会内に『パラスポーツ支援ありかた検討ワーキンググループ』（以下，パラスポーツ支援WG）を設置し，以下に示す三項目を活動骨子として，いくつかの事業を企画・実施してきた。

① パラスポーツ及びパラアスリートへの支援の可能性に関する検討
② 関係省庁及び都道府県との意見交換
③ 2020 年東京パラリンピック支援のあり方に関する検討

例として，社会における「障害の理解」や義肢装具士への認知向上を目的に，東京都教育委員会が主催する『オリンピック・パラリンピック教育推進支援事業』へ参加し，2018 年 2 月には中央区立月島第二小学校にて 5 年生 82 名を対象に，義足ユーザーによる講演や『義足体験プログラム』などを実施したのを皮切りに，これまで 8 校の小中学校で啓もう活動を展開している。

2020 東京パラリンピックに関連する事業としては，途上国のパラアスリートの参加を支援する目的で，アフリカのトーゴに義肢装具士 2 名を短期派遣し，現地の義足のパラアスリートに対してスポーツ義足の提供やトレーニング等の支援を行ってきたことに加え，Otto bock 社が東京パラリンピック期間中に展開する“Official Service Supporter”に JAPO 会員を派遣し，全選手に対して無償で行われる義肢装具，車いす等支援機器の修理サービスを行う予定である。

スポーツ庁事業との係わりについては，令和元年度「障害者スポーツ推進プロジェクト（障害者スポーツ用具活用促進事業）」の採択を受け，「障害者のうち，特に義足ユーザーのスポーツ参加を推進するために，スポーツ用義足の設計，製作，適合（フィッティング）を正しく行うことができ，また，ランニング等義足を用いたスポーツ動作を正しく指導できる義肢装具士を育成すること」を目的に，義肢装具士を対象とした技術講習会『スポーツ義足フォーラム』を全国 6 会場で開催した。参加者数は 86 名であった。

3. シンポジウムの開催へ向けた計画

1）本事業の趣旨

本事業の目的は，現在活動している障害者スポーツチームの代表者を招いて Web セミナー形式のシンポジウム(“障害者スポーツチームシンポジウム 2020”)を開催し，ここで運営ノウハウ等に関する各チームの知見を集積し，他者と共有すると共に，共通の課題の抽出と解決のための検討を行うこととした。その際，シンポジウムには医師や義肢装具士，理学療法士等，障害者スポーツを直接的に支援する専門職だけでなく，当事者である障害者，行政に携わる方々へも参加を募り，シンポジストらと共に今後の障害者スポーツ促進を念頭に置いた支援のあり方や，用具の活用などについてディスカッションを行うこととした。なお，参加費は無料とした。

加えて，本シンポジウムによる成果を広く他者と共有するために，シンポジウムの内容を冊子としてまとめこれを関係者へ配布することとした。

2）実行体制

本事業の実行体制として，JAPO 側責任者に坂井一浩(パラスポーツ支援WG委員長)が，また，事務業務担当に黒澤仁一(事務局長)が就いた。このうち，坂井は JAPO 役員会への連絡・報告等を行うと共に，スポーツ庁との意思疎通のほか，事業全体を統括することとした。また，黒澤は主として委託事業経費の管理を担った。

シンポジウムのプログラム編成および講演者の人選について JAPO 内で協議，決定した。その際，団体として障害者スポーツの支援に関わっておられるシンポジストには，以下の項目を中心にご講演いただくよう，依頼することとした。

- 団体の沿革
- 対象としているスポーツと主な活動

- 参加者(障害者)の募集方法
- 運営，人的および経済的資源
- 課題，他

シンポジウムの開催形式は，新型コロナ感染予防を考慮しオンラインとした。なお，参加登録者の管理やオンライン配信については株式会社日本旅行へ業務を委託することとした。

3) 準備

シンポジウムの準備等に係る会議・打合せは，すべてオンライン又は電話によって行った。

- 2020 年 12 月：シンポジスト候補者への招聘状を発送すると共に，JAPO ホームページに参加登録用バナーを設置した。
- 2021 年 1 月：ポスターを作成するとともに，関係者・関係団体へ広報を行った。
- 2021 年 2 月：シンポジウム開催直前に，各シンポジストとオンラインによるリハーサルを行った。

4. シンポジウムの開催

1) シンポジウムの構成

2021 年 1 月 17 日(日)，“障害者スポーツシンポジウム 2020”をオンラインで開催した。

シンポジウムの構成は 8 名のシンポジストによる講演からなり，前半は障害者スポーツ全体を捉える包括的な内容とし，後半は，障害者スポーツチームの運営や支援等，実践的な内容とした。

全ての講演者は会場(御茶ノ水ソラシティカンファレンスセンター)，またはその他の場所からライブで参加した。また，参加者からの質問は Zoom のチャット機能を用いて受付け，各講演の終了時に設けた意見交換・質疑応答の時間において対応した。

司会進行は坂井が行った。

冒頭，スポーツ庁健康スポーツ課障害スポーツ推進室の矢野直香様より，スポーツ庁における障害者スポーツ政策についてご紹介いただき，続いて公益社団法人日本義肢装具士協会・野坂利也会長より，主催者代表として挨拶があった。

シンポジウムの順序，各講演のタイトル，講演者の氏名と所属は以下のとおりである。

- 『地域における障害者のスポーツ環境について』
  小淵和也氏(笹川スポーツ財団・政策ディレクター)
- 『パラスポーツが抱える課題 ～課題があるから変化が生れる～』
  上原大祐氏(NPO 法人 D-SHiPS32・理事長)
- 『障害児のチャレンジを支える ～ハビリスジャパンの取り組み～』
  藤原清香氏(一般社団法人ハビリスジャパン・理事，東京大学医学部付属病院リハビリテーション科講師)

- 『アスリートによる普及活動の意義』
  田中時宗氏(一般社団法人センターポール・代表理事)
- 『スタートライン Tokyo の取り組み』
  駒場佳世子氏(スタートライン Tokyo・理学療法士)
- 『東北で活動する義足スポーツサークル Ambeins の取り組み』
  佐藤陽介氏(アンベインズ 代表・理学療法士)
- 『参加者の遷移 ～オスポランニング教室の場合～』
  沖野敦郎氏(OSPO 代表・義肢装具士)
- 『アンプティサッカークラブ・FC ALVORADA の活動と義肢装具士の関わり方』
  野口 魁(アンプティサッカークラブ・FC ALVORADA，義肢装具士)

各講演後にはディスカッションの時間を設け，オンライン参加者からチャットで寄せられた意見や質問を司会者が紹介し，討論を行った。

2) オンデマンド配信

シンポジウムでの講演について録画・配信の承諾が得られた演者の講演のみ，JAPO ホームページ上のバナーからオンデマンドで視聴可能とした。その際，期間は 2021 年 1 月 19 日から 2 月 5 日までの間とした。

シンポジウムへの参加者は，当日のライブ配信とオンデマンド配信を合わせて 256 名であった。主な内訳を以下に示す。

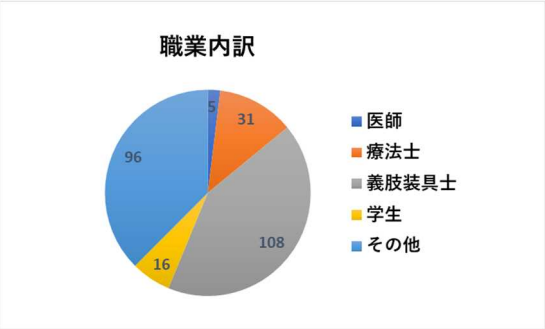

図１　参加者の内訳

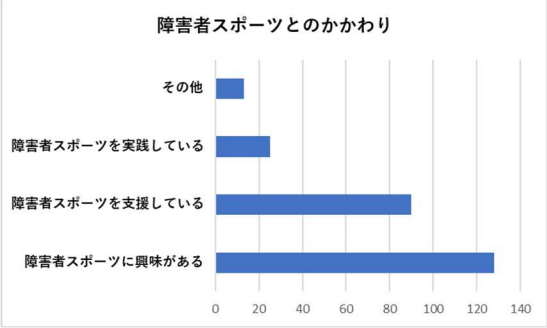

図２　参加者の障害者スポーツとのかかわり

3) 冊子の作成

本シンポジウムの成果をより多くの方々と共有するために，各講演の内容やディスカッション等を冊子としてまとめ，関係者へ配布することとした。講演者(シンポジスト)のうち，原稿作成をご承諾いただいた方には当該の原稿を，また，そうでない演者については講演の要旨をまとめ掲載した。

5. 考 察

1) 各シンポジストの講演(要旨)

はじめに小淵氏より，笹川スポーツ財団によるこれまでの調査結果に基づき，障害者スポーツを取り巻く全体像について紹介された。東京オリンピック・パラリンピック 2020 を契機に，特にメディアの扱い等社会的関心は高まっているようにみえる反面，パラスポーツに関する国民の理解度やパラリンピアンに対する認知度は決して高くはないこと，各自治体での障害者スポーツに関する取り組みについては，専門性が必要とされる事業は専門性の高い団体に委託することが増えたため，行政主催事業としては減少傾向にあること，障害児・障害者に目を向けると，スポーツレクリエーションの実施頻度は 2013 年から 2017 年の間をみてもさほど伸びておらず，そもそもスポーツに対し無関心な層がおよそ半数を占めていることなどが報告された。今後，障害の多様化とスポーツ参加レベルの多様化に応じた環境設定や人材支援が求められていることが示唆され，この実現には人的あるいは組織的な連携が不可欠であることが強調された。

次に上原氏の講演では，障害者当事者としての幼少期からの経験に基づきながら，障害の有無に関わらず子どもたちがスポーツを楽しめる環境をつくることを目的としたいくつかの活動が紹介された。子供達にスポーツを届けること，自分が嫌だと思った事を次世代に残さないよう考え，活動を実践していること，パラスポーツはまだまだ「障害者」のためのスポーツと勘違いされているが，「誰もができる」スポーツである事を世の中に広める必要があること，選手の発掘だけでなくスタッフの育成が求められている現状について報告された。2020 東京パラリンピックへ向けて多くのパラスポーツイベントが各地で行われているが，パラスポーツへの参加に必要な用具についても，特に子供に関しては成長・発達に伴ってすぐに使えなくなってしまうことや，保護者の経済的な負担について対応が必要であることが強調された。

次に藤原氏の講演では，ハビリスジャパンの設立経緯とビジョン，主な活動について紹介された。手足に障害のある子ども達に多様なチャレンジの機会を提供したいと考えた有志が集まり，「子どもたちがその子らしく成長できる未来を育むために」をスローガンに活動していること，障害のある子ども達に障害による不参加を受容させるのではなく，様々なことに挑戦し達成することで自己肯定感を育むと共に，身体および精神の健全な成長と発達を支援することが重要と考えていることについて強調された。先天性上肢形成不全・欠損児の多くは，障害のために患側肢での支持・荷重経験が乏しく，左右の上肢長差による非対称性のために両手での身体支持が難しく，指の欠損のためにぶら下がり運動や両手での道具操作なども困難であり，このため，他児と一緒に行う学校体育において，「できる」「できない」が明確化する器械運動の課題は，障害児自身が自らの障害によって自己肯定感を損なう機会に繋がりやすいことが報告された。補装具の支給対象は日常生活動作の向上に限定されているが，子供の場合，体を使った遊びや運動などもこれに含まれるべきであること，東

京大学医学部附属病院リハビリテーション科の調べによると，3 歳以上のすべての患児・家族にスポーツ等活動参加の希望があること，また，実際に多くの児が特例補装具支給やハビリスジャパンからの運動用手先具の無償貸与などで，生活の中でもアクティビティ用義手を活用しているとの報告があった。

次に，田中氏より一般社団法人センターポールの活動について紹介された。活動の骨子として，①パラアスリートの活動支援，②パラアスリート学校交流事業，③パラスポーツイベントの運営，④パラスポーツ定期運動クラスがあり，このうち「パラアスリートの活動支援」については，個々の選手に対するスポンサーの獲得やメディア対応等のマネージメント業務を行っていること，「パラスポーツイベントの運営」については，年間およそ 100 校の学校をパラアスリートと共に訪問していること，「パラスポーツイベントの運営」については講演会，体験会，研修などを企画・運営していること，また，「パラスポーツ定期運動クラス」については，障害児や健常者も交えたパラスポーツの練習会を行っているとの報告があった。センターポールの趣旨は“パラアスリートの価値化”であり，これらの活動はいずれもパラアスリートの経験を価値として発信する機会につながっているとのことであった。所有する車椅子を使っての小・中学校でのパラスポーツ体験会は『障害の理解』につながるだけでなく，個々のパラアスリートの取り組みや姿勢を垣間見ることにより，これが生徒を勇気づけ，チャレンジへの後押しになることが実感できているとのことであった。障害児には継続してスポーツに取り組める環境づくりが求められているなかで，2020 年 6 月からスタートさせた，肢体不自由児を中心とした練習会“Adaptive sports class”では，センターポールが所有する車椅子を参加者に無料で貸し出し，現役のパラアスリートがコーチとなり，健常児も交えた練習会を行っているとのことであった。このような場を通じて，障害児たちが抱く憧れや目標の設定は次世代の育成につながるものであり，これもまさにパラアスリート価値であるということが強調された。

次に，スタートライン Tokyo の取り組みについて駒場氏より報告があった。スタートライン Tokyo は都内で活動する切断者を中心としたスポーツチームであり，1992 年，鉄道弘済会の臼井二美男氏(義肢装具士)が個人として始めた活動に端を発する。構成は義足ユーザー，理学療法士(11 名)，義肢装具士(5 名)，医師(1 名)，コーチ(1 名) から成り，このうち義足ユーザーについては 2020 年 11 月現在で，未就学児から 70 歳代の 150 名以上が登録し， 118 名が活動中とのことであった。チームのモットーは，「走ってみたい人なら，誰でも歓迎」,「走る練習を通じて心身共に元気になり，より本人らしい生活を広げていくこと」であり，実際に，義足で独歩可能であり，走ることへの意欲あれば，義足走行は実現可能であるとのことであった。チームとしての主な活動は，①全体練習会 1 回／月，②個人練習会 1 ／週，③競技会への参加，④障害者スポーツ啓発イベントへの協力であり，1 回の練習会に 20～40 名が参加するとのことであった。その際，参加者の大半は鉄道弘済会義肢装具サポートセンターにおいて義足を製作した方々であり，その他，テレビや新聞などのメディア

を通して活動を知った方，口コミ等であるとのことであった。練習会は，公的な陸上競技場等を予約して行うことが多く，走行用義足の手配は，①鉄道弘済会が他の組織と共同で開発しているフィールドテスト用の義足やアスリートからの寄贈などチーム所有の義足を貸し出すこと，②同じく，鉄道弘済会スポーツ支援事業や 24 時間テレビからの個人への贈呈，③パシフィックサプライ株式会社によるレンタル品，④自費での購入などであるとの報告があった。また，チーム運営に係わる費用については，参加費は無料であり，スタッフもボランティアである。その他，傷害保険はチームで負担，その他トレーニング用品，救急道具等はスタッフ負担ということであった。

続いて沖野氏より，自身の主催するオスポランニング教室についての報告があった。2016 年 12 月より活動を開始したこの教室は，主に義足ユーザーを対象としたランニング教室であり，2021 年 1 月までに計 46 回の開催実績がある。総参加人数は延べ 474 名であり，片義足ユーザーが 7 割程度であるが，上肢障害・機能障害ユーザーを含んでいるとのことであった。費用は，施設使用料５００円，ランニング教室参加費５００円，ギソクの図書館使用（板バネレンタル）５００円と有料ではあるものの，教室には下腿義足と大腿義足のパラリンピアンが参加して走行指導を行い，高価な板バネも安価な値段でレンタルできるとのことであった。なお，教室では義足板バネの交換方法も指導しているが，ランニングを日常化している義足ユーザーはむしろ少ないのが現状であるとのことであった。

次に，野口氏からアンプティサッカーチーム FC アウボラーダの活動に関する報告があった。チーム名の由来はポルトガル語の『夜明け』であり，事故や病気などで手や足に障害を負った方々に，選手がスポーツに打ち込む姿を見ていただくことで，心の奥にある希望や勇気をもたらす事が出来ればとの願いが込められているとのことであった。チームには選手としてゴールキーパー(上肢障害者) 5 名，フィールドプレーヤー(下肢障害者)13 名が参加しており，多くの場合，知人や義肢装具士の紹介，体験会やメディア媒体を通じて知ったことがきっかけであるとのことであった。また，スタッフは 11 名おり，このうち医療従事者は義肢装具士 1 名，理学療法士 4 名であるとのことであった。チームの主な活動は，練習会(日曜日の午前，月に 2 ～ 4 回)と公式戦への出場，アンプティサッカー関連のイベント参加，チームへの依頼対応となっている。チームの運営については，幹部 8 名による意思決定の他，会計，広報，用具管理などを行う事業部門に分かれており，このうちチームの収入については，スポンサーからの支援(物品提供を含む)の他，各イベント対応や学校などの教育機関での出張授業に対する謝礼，日本アンプティサッカー協会からの助成が主であるとのことであった。チームの課題として，はじめに練習場の確保が挙げられた。特に，アンプティサッカーは砂のグラウンドではクラッチが滑って転びやすいことから，人工芝や天然芝のグラウンドが求められ，関東広域に点在する所属選手がアクセスしやすい練習場探しが困難であるとのことだった。また，競技面では，切断障害に伴う放熱機能の低下から，熱中症のリスクが高まると考えられるため，夏場は休憩を多く取り，体温を下げる工夫などの注意喚起していること。また，基礎疾患を持つ選手に関する情報共有，健側肢の負担軽減，怪我の予

防は常に考慮しながら活動しているとのことであった。

最後に佐藤氏より Ambeins の活動報告がなされた。Ambeins は，義足使用者の動作スキルの向上，情報交換の場・コミュニティとしての機能，理学療法士・義肢装具士の知識・技術向上を目的とし，東北の義足使用者を集め，年に数回の走行練習会や各種セミナーへの参加，義足についての勉強会などの活動を行っている。このうち，参加者の募集に関しては，義肢装具士による義足ユーザーへの声掛けや他団体からの紹介，義足関連講習会や SNS を通じて行っているとのことであった。義足使用者の走行練習会には初心者から上級者まで幅広いレベルの切断者が集まっており（これまでの参加者は義足使用者 11 名），年齢層も 10 代から 60 代と幅広いことが報告された。練習会では，理学療法士による初心者向けの走行動作の導入や運動後の断端のアイシングの指導に加え，義足使用者同士が教え合うことも多いとのことであった。加えて，アスリートを目指すメンバーに対する支援として，トレーニング指導，二次障害を予防する目的で，障害に応じた機能に合わせたフォームの見直し，コンディショニング指導，情報提供等を行なっているとのことであった。チームの運営は，義足に興味を持つ理学療法士と義肢装具士からなる有志によって行われており，コアメンバーとして理学療法士 1 名，義肢装具士 1 名の他，準備や練習会当日などは理学療法士や義肢装具士の仲間がサポートメンバーとして加わっているとのことであった。物資に関し，スポーツ用義足パーツはメーカーからからレンタルなどを利用し，参加者がそれぞれ準備していること。また，必要な工具やスペアパーツ等については，義肢製作所や義肢メーカーなどからサポートを受けていることが報告された。スポーツ用義足は高額なため個人で購入することが難しく，Ambeins の練習会でしか走ることができない参加者が多いとの報告があった。練習会場には，比較的安価で利用できること，タータンや芝などを使って様々なアクティビティや練習ができること，義足での走行に対して理解を得やすいことなどから，陸上競技場を主に使用しているとのことであった。反面，雪国である東北では，冬期間は陸上競技場の使用ができないこと，練習会当日が雨天の場合の対応を考える必要があること，一般の利用者からの目が気になる場合があるなどの短所が挙げられた。最後に，活動の継続性が課題として挙げられた。東北は広く且つ雪国であることから参加者の移動や交通面での利便性に問題があることに加え，スタッフの不足により活動回数や範囲が限られてしまうといった問題が挙げられた。

2) オンライン参加者について

参加者の内訳(図１)では，「その他」が占める割合が高かった。これには障害者，障害児の保護者，支援者が含まれており，障害当事者のスポーツへの参加の関心や要望が少なからずあることについて，小淵氏や藤原氏らのコメントを裏付けるものである。また，参加者のうち医師・療法士・義肢装具士については，実際に障害者スポーツの支援に関わっている方々が多く，このようなシンポジウムは情報共有・意見交換のためのプラットフォームになり得ることが示唆された。

3) 本シンポジウムの意義と目標達成度

Tokyo パラリンピック 2020 をきっかけとした障害者スポーツへの関心の高まりがあり，また，障害者スポーツが『パラスポーツ』して一般化されようとする流れがある。一方で，障害のある方々のスポーツ参加に必要な人的・経済的支援，用具の利活用を含めた環境の整備は十分に整っているとは言えない状況にあり，本シンポジウムでは従って，障害者スポーツチームの運営や支援に実際にかかわっておられる方々を招き，各チームの運営等に関する知見を集積・共有すると共に，共通した課題の解決についてディスカッションすることを目的とした。

シンポジウムには 8 名の講演者にご登壇いただいた。また，参加者数は，当日のライブ配信とオンデマンド配信を合わせて 256 名であった。

本シンポジウムではいくつかの視点が提起されたが，この一つに『障害児のもつ可能性』が挙げられる。上原氏，藤原氏らにより，障害児が遊びや運動を通して学び，自己肯定感を得ることの重要性が強調された。保護者や医療関係者を含めた周囲の大人たちの考え方により障害児の可能性がさらに拡大していくか否かが決まる。上原氏，藤原氏らの取り組みは，障害児の支援に関わる多くの大人たちに広く共有されるべきであり，本シンポジウムを意義づける講演であったと考えられる。

パラアスリートの価値化に言及したのは田中氏であり，個々のパラアスリートのバックグラウンドや競技への取り組み，努力の姿勢が多くの人たちを勇気づけること，また，これらをより多くの人たちと共有するための仕組みづくりでさえも，障害者スポーツ支援の一部であることが強調された。単に競技の成果だけに焦点をあてるのではなく，パラアスリート個人を“プロモートする”という考え方は，新たな支援のあり方として共有されるべきと考えられた。

理学療法士，あるいは義肢装具士として障害者スポーツにかかわり，チームの活動を支援している“専門職ボランティア”の代表として，沖野氏，駒場氏，佐藤氏，野口氏にご登壇いただいた。支援活動の多くがボランティアベースで行われる中，参加者の募集や用具の調達を含めた練習会の運営，競技会への参加などについて共通の課題が存在するように思われた。オンライン参加者には療法士，義肢装具士も多く，本シンポジウムは情報交換，課題共有の場になったと考える。

以上のことから，本シンポジウムは，チームで支える障害者スポーツの枠組みを考えるうえで大変有意義な機会となった。配布の冊子に関しても，関係者にとって有用な情報源となることが期待される

終わりに，本シンポジウム開催をご支援くださったスポーツ庁の皆様，シンポジストの方々，相談に乗ってくださった岩崎満男様に感謝申し上げます。

○著作権者	スポーツ庁　健康スポーツ課　障害者スポーツ振興室 〒100-8959　東京都千代田区霞が関３－２－２ 電話：03－5253－4111(代表)
○発行元	公益社団法人日本義肢装具士協会 〒113-0033　東京都文京区本郷５－３２－７　義肢会館 202 電話：03－5842－5457

本報告書は令和２年度スポーツ庁委託事業として、公益社団法人日本義肢装具士協会が実施した「障害者スポーツ推進プロジェクト（障害者スポーツ用具活用促進事業)」の成果を取りまとめたものです。
従って、本報告書の複製、転載、引用等にはスポーツ庁の承認手続きが必要です。